

国木田独歩考（第一部）

—「欺かざるの記」を中心として—

小林茂大

唐木順三氏が「現代日本文学序説」に次のように書いている。

明治の詩人中私の胸に特に屢々往来する一系列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。（中略）彼等も他の明治詩人から區別する所の彼等に共通の特徴は彼等が単に完成せる芸術を創ることそのこと（云うまでもなくかようなものは事実無い）を指さずして、直ちに人生の全般的考察を指した点に、そのために彼等が物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経て薄幸に終わった点に、しかもそれら凡てに拘らず、彼等が未完成のままに残した多くの仕事、矛盾と焦燥と動乱の中に棲む我々の胸に幾多の考うべきものを考えずには置かない点にある。

唐木氏のいうように、彼等は文学者であるよりも人であろうとした。文学を考え、文学に苦しむ前に、人生を考え、人生を苦しんだ人々であった。文学は彼等にとつては寧ろ「悲しき玩具」であったのである。

独歩の文章にして今日見得る最も古いものは、書簡等は別として、まず彼の日記「欺かざるの記」であろう。この日記は明治二十六年二月四日から始まり同三十年五月十八日に終る、独歩二十三歳から二十七歳までの思索・恋愛・苦悶等の欺かざる精神の告白である。

人生において最も重要な青年期に、独歩なる人間が如何に苦しみ如何に自己を形成して行ったかを知るために、われわれはまずこの日記を研究しなければならない。しかも、独歩の生涯における重要な出来事はほとんどこの日記を書いている間に起つていたのである。

独歩が金森通倫の経営する自由新聞社に記者となり、月給三円也を支給されたのは明治二十六年二月十六日、この日記を書きはじめてから十二日後であった。しかし彼は二箇月後には新聞社を退き、同年九月、徳富蘇峰・矢野龍溪の仲介によつて豊後国佐伯の鶴谷学館の教師となり、弟収二を伴つて赴任した。水郷佐伯の明媚な風光は独歩の詩情を豊かにし自然への愛をいよいよ深くした。翌二十七年七月日清戦争がおこり、独歩は鶴谷学館の教師を辞めて上京、国民新聞社に入社し、十月には従軍記者として軍艦千代田に乘組み戦地に赴く。その時の通信の国民新聞に連載されたのが「愛弟通信」である。翌二十八年三月帰国、その後は「国民之友」の編集に従事した。六月佐々城信子と恋に陥り、十一月結婚して相州逗子に居を卜した。彼が北海道開拓の志を抱いて空知川沿岸を踏査したのは、信子と相識つてから結婚するまでの間である。しかるに、新婚後いくばくもない二十九年四月十二日、新妻信子は突然姿を隠した。この

事は独歩の生涯における最も大きな精神的打撃であり、長く彼の心に傷痕を残した。彼はその創痍を癒そうと渡米を企てたりしたがそれは実現しなかった。同年九月東京市外渋谷村に弟と共に卜居し、其処で田山花袋・柳田国男等と相識るに至った。翌三十年夏、花袋と共に日光に行き照尊院に寄寓して「源をち」を書いた。

後の独歩の作品の素材・思想・情緒等は「欺かざるの記」の中に現われているものが多い。「源をち」も、彼が佐伯時代に実際に見た「紀州」と呼ばれていた乞食と、彼を去った愛妻信子に対する感情とが絡み合っていることを知るであろう。

「紀州」のことは「欺かざるの記」に二三箇所出て来るが、三十年一月二十二日の記には

ああわれ彼の紀州乞食を思へば愈々人生の不可思議なるを感ず。世の政治家をして其の功名心を弄せしめよ。世の文人をして其の空文をたのしましめよ。願はくはたゞ吾をして何時も心浮世の波に迷はんとする時、彼の乞食を忍ばしめよ。ああ憐れの靈。今如何にしたる。ああ人の子よ。今如何にしたる。ああ神よ彼の人の上をめぐみ給へ。ああ憐れの少年よ。

人生とは何ぞや。ああ人生の目的は如何。ああ彼の乞食を思へば此間の意味の一段に深きを覚ゆ。

とあり、その後に一線を画して

信子、信子、御身の一生は如何。独身の一生は遂に如何んするぞ。神よ此の不幸なる女の上を憐れみ給へ。

と書いている。この一月二十二日の記事は、そのまま「源をち」の

モチーフであったといつてもよからう。

花袋の「東京の三十年」の中の「KとT」には二人が照尊院に寄寓した時のことが書いてあるがそれには

Kの日記は苦しい事実と悲しい記録で満されていた。Kの卓の上には、詩集や小説と雑つていつも必ずその日記の一冊が載つていて、やがて着手すべき処女作の材料を其処から探し出すようにしてかれはそれを繰返しながら昔を思った。

「源をち」は人間関係における愛の不如意を描いているのではなく、人間に課せられた愛の不如意、即ち愛を通して見た人間の運命の不如意を描いている。源をちの愛から愛妻と愛児が奪われてしまったのは運命であり、紀州に注ぐ源をちの愛情が紀州に通じないのも運命である。それは紀州が人間の愛情を感じる能力すらない白痴だからで、これは紀州に課せられた哀しい運命である。にも拘らず、そういう紀州をなお愛せずにはいられない運命を源をちはどうすることも出来ない。運命という大いなるさだめの前に人間の愛が如何に儂いものであるか、しかもなお愛せずにはいられない宿命的な人間の愛の深さ、その人間に課せられた運命のあわれさ、独歩はそれを描こうとするのである。

運命、これは独歩文学の最も大なるテーマであった。彼が人間の運命について描こうとした作品は非常に多い。作品集の一つがその名を持っている。明治二十九年九月十五日の記を見る。

秋雨蕭々たり。昨年今日、信子と共に塩原に在りき。今や如何、今や如何。彼女は吾を捨てて走りぬ。今や北海に母と共に在

りと聞く。今や吾は憂魂を懷きて渋谷の閑居に在り。相へだつる數百里、彼の女の心冷えゆきたり。人生夢に似たりとは此の事ぞかし。人生の悲惨は多くはキヤラクターの結果なり。これ最も悲惨なる悲惨なり。吾もその一人、信子も其の一人。キヤラクターは遺伝なり。故に悲惨は遺伝より來るてふゾラの説は真理なるが如し。

信子との愛の破綻を二人の性格によると反省し、性格が人間の運命を決定すると考えるゾラの実験小説論に説くところを首肯する。しかしゾラ流のデテルミニズムでは独歩は割切れないのである。例えば「河霧」を見ることにしよう。

成功を夢見て都会へ出た豊吉は、失敗して敗残の余体を掲げてこっそり故郷へ帰って來た。かつて豊吉が郷関を辞した時、郷関の誰彼が皆彼の成功を期待してその首途を祝ってくれたのであるが、中にただ一人「杉の杜のひげ」と呼ばれている拗者の老人が、豊吉の前途について不吉な予言をしたのである。豊吉は善人であり、相当に才も根氣もあったが、その性格に何処となく影の薄いところがあった。「杉の杜のひげ」が豊吉のそうした性格から考えて予言したのかどうか、それは解らない。が兎も角、豊吉は失敗して故郷へ舞い戻って來たのである。故郷へ帰った豊吉は郷関の同情によつて私塾を開くことになつた。いよいよ明日は開塾という前夜、月光に誘われて家を出た豊吉は、墓地を歩いて「杉の杜ひげ」の墓に腰かけ月を眺めて憩う。豊吉はそれが「ひげ」の墓であることを知らないし、「ひげ」も勿論豊吉が失敗して帰って來て自分の墓に腰かけるとまでは予知しなかつたであらう。其処から河岸に下りた豊吉は、

岸にもやいてあつた小舟を弄び中流に出て霧の中を下つた。そのまま豊吉は永遠に帰らなかつたのである。

社会の変動期であつた明治時代初期には、立身出世を夢見て郷関を出た者が多かつたであらう。しかし成功者の蔭には多くの失敗者があるのである。成功失敗の岐路は何処にあるか、それは人知を以てしては測り難い。いわゆる運命であると独歩は考へる。

独歩の運命觀は、ゾラ流の決定論では割り切れない神秘的な霧りがある。そうした人間の運命を不可思議と思ひ、そしてその不可思議に置かれた人間の存在を想うのである。

独歩が人間の運命を主題にしたものは「女難」「運命論者」から晩年の傑作「二老人」その他数多いが、小品「たき火」にしてもそうである。子供達が夕暮の浜べで火を焚く、子供達が帰つた後、一人のさすらいの旅人がその火にあたつて暖をとるといふこの簡単な小品にも、人間の歴史、運命、愛といふようなものが作品の背後に覗いている。夕暮の海岸に燃える火と、子供達と、旅人を描いてわれわれにそれを思わしめるのは、人間の運命に常に想いを潜めている独歩の想念が、この作品を支えているからではあるまいか。この作品の結末を味うといふ。人間の営み、愛のかたみは人から人に受け継がれて行くけれど、やがてはエターニティの中に没し去る。これが運命である。と独歩はいわんとしてゐるのである。

独歩の描こうとするものは社会における人間關係ではなく、宇宙における一存在として運命けづられた人間の姿であつた。人間の運命を想うことは、人間存在の不可思議を想うことであつた。

無窮の時間、無窮の空間に包まれたる人生は実に不思議なり。無

窮の時間と空間が人間の思想に不思議と認めらるる限りは人生は不思議なるなり。

嗚呼タイム。凡てのもの此の永劫の海に浮沈生滅す。嗚呼幻なる哉。時！昨日昨夜何処にある。凡ての過去何処にある。吾！これ幻なる哉。嗚呼吾の生存を感す。此の現存する吾！此のタイム。此の無窮！知らず相関する深意は如何。此の不思議に光明を投ぐるものは何ぞや。吾之を欲す。実に之を欲す。

これは明治二十七年八月十七日の記である。この月の一日に独歩は佐伯を去った。

天地人生の不可思議を叫ぶ言葉は独歩の日記の到るところに見られるが、殊にこの前後に多い。佐伯時代の独歩はワーズワースを読みカールを讀みゲーテを讀みショーペンハワーを讀んで、最も神や自然や人生に想いを潜めた時期であった。そして彼の求めるものは如何にしてわれ真実に生くべきかということであった。これを独歩はシンセリテイ (Sincerity) と呼ぶ「真実」または「真誠」の字をあてている。

独歩が再度上京して国民新聞社に入り、従軍記者として千代田艦に乗組み、艦上で迎えた除夜の記 (二十七年十二月) は次のように書いている。

神聖なる宇宙、不思議なる人生！吾をして歳月と共に愈々此の神聖と不思議とを直感せしめよ。吾が願は是れなり。

明かに言へば吾今進歩なし。

明かに言へば吾シンセリテイの度に於て退却せるを覚ゆるなり。

これ戦慄すべき退却なり。何となれば是れ自滅なればなり。(中

略)

吾が存在の不思議を直感し能はざるに至らば吾が靈己に癡痺したるなり。

嗚呼吾れ祈念を神にこらさん。

独歩の願ひは、この人生の不可思議を常に痛感し、それに驚異していたいということであった。「世の中を夢と見る見る果敢なくもなほ驚かぬわが心かな」この西行の歌を彼は幾度も「欺かざるの記」に書きつけていたのである。

人間がこの宇宙や自己の存在の不可思議に驚異の念を抱くのは、その心が独歩の所謂シンセリテイの時である。従つて俗事に煩わされ俗情に埋没している時はシンセリテイを欠く。シンセリテイは勝義における精神の昂揚である。恋愛もまた、人間においては精神の最も純粹に昂揚された状態であり、シンセリテイに生を感じている時である。佐々城信子との恋愛時代にまたこうした記事が多くなる。

天地と人界、吾今にして漸く、天地の外、人界あるを知り、人界の外、天地あるを知らむとす。われ、天地の間に介立し、われまた人界の裡に処身す。

天地と人界と吾と、其のうちに限りなき神秘を藏す。宗教の真理とは此の三者の調和なり。而してわれ未だ神の信仰薄弱なるが故に、此の大調和あらず。

嗚呼此の不思議なる天地に対して、われ吾が心霊を認めざるを得ず、而かも人界に在りては常に肉の慾望に苦まん」とす。

目さむるごとに其の身を天地の間に見出す者は幸なる哉。されど

われは忽然睡眠よりさむる時、氷の如く響き来るものは人界の雜響にして、身は忽ちまた紛々たる慾望、主我競争の中に投げ込まれ、ああ復終日鞭声を聞かざるを得ざるかと感ず。

嗚呼、不思議なる天地に於ける不思議の人界。(中略)

人は曰く、天地の間に在りては人間の渺乎たる一小粟の如きを感じずと。吾に在りては然らず。われは人界に在りては残念乍ら、いと小き未だ何等自得の偉大を感じ得ず、自然一身の孤立を覚ゆれども、眼を転じて天地に対する時、実に心靈の底より声あり。われは無窮の天地に実存すと。(圈点筆者)

この日記は独歩が信子と結婚する十数日前の明治二十八年十月二十八日の記である。

ここで注意したいのは、独歩が「実存」という語を用いていることである。彼が「実存」という語を用いたからといって、それが今日の実存哲学あるいは実存主義の実存と直接関係のないことは勿論である。今日わが国で実存哲学と訳している Existenz-philosophie の Existenz を最初に「実存」と訳したのは齊藤信治氏の説によれば、京都大学の故九鬼周造教授が昭和八年に岩波哲学講座に「実存の哲学」を書いた時で、これはわが国における最初の実存哲学の学問的紹介であったというのである。

独歩は自分のこの宇宙における存在を「存在」といったり「実存」といったりしたが、終に「実存」という語を用いるに至ったのである。彼が、自己のまた人間のこの宇宙に置かれた姿、その存在のしかたを想う時、一般にいわれている存在とか実在とかいいう言葉では表現しきれないものを感じるようになり、その自己の存在意識

にびったりする言葉を求めたすえ「実存」という語で表現したのであろうと思われる。今日の実存哲学における Existenz (Existence) が、単に事物がそこに在るといふ意味の「存在」を意味するものでないと同じように、独歩の実存も単なる存在を意味するものでなかったことが注意されなければならない。

われわれはこの世界に生まれて来た。ハイデッガーは人間の存在を「世界内存在」と規定したが、われわれの存在しているところは人間の世界である。人間の世界とは畢竟人間の社会である。われわれはこの社会内に生まれて来たが故に己の属す社会の言語・風俗・習慣・道徳・法律等に従うべきことを条件として強いられて来たのである。強いられたといっても、われわれの自我がまだ発達しない幼時から徐々に訓練されて来たのであるから、所謂「習い性」となって、それに背反することがかえって苦痛を感じるまでに馴致されてしまったのである。しかし、こういう人間の生き方は馴致された生き方で、本来的なものとはいえない。ハイデッガーはこのような非本来的な生き方をマン (man) 即ち「日常人」乃至「平均人」としての生き方と呼び、このマンの世界の外に脱け出して本来の人間自身として生きることがエクシステンツといったのである。故に実存の本質は超越 (Transcendenz) であるという。即ちマンの外に脱け出これを超越することである。従って、実存哲学の根本精神は無限否定の精神であらう。既成觀念の世界をどこまでも突き抜け、絶えざる自己否定と自己超越によって、本来の赤裸々な個体的な自己の姿に還らうとする精神である。

独歩がしきりに宇宙の不可思議に驚きたいと願ったのは、ハイデ

ッガーの所謂マンの境地を脱出して本来の赤裸々な自己の存在の姿に魂を戦慄させたいという願いに外ならなかったのである。彼の日記の到るところに叫ばれているこの願いは実存哲学における自己超越の願いと同質のものであるといふ。更に日記からいくつかを抜粋してみよう。

人生其れ自身不可思議なり。故に人はこの不可思議を痛感すべき筈なり。而してこれを痛感せずして尚ほ人生の事を考へるといふ。これ考へざるを得ずして考ふるに非ずんば其の考究や忽ち止め得るの考究なり。止め得るの考究は考究に非る也。たとへば茲に人あり自己の天地の間に介在するを感ずることあたかも暗室内に投げられし人が、其の暗黒と室内とを感ずるが如く痛切なり。故にかれは出口を求むること彼の人の出口を求むるが如し。此の如きを人生の事を考ふるとはいふなり。

天地人生は不思議なり。されど人若し其の不思議を忘却し放棄し得べくんば、彼は不思議のとき難きが故に非ずして不思議を不思議と感ぜぬなり。（「欺かざるの記」明治二十九年三月十三日）今「サルトル・レザルタス」の第一章を読み終りぬ。新なる啓示の開かれつつあるを感じぬ。彼は何故に神を見ざるか。此書は此の答に対して少しく答ふる処あべし。Man's Soul wears as its outmost wrappage and overall; wherein his whole other Tissues are included and screened, his whole Faculties work, his whole Self lives, moves, and has its being.

余の切に感ずる所もまた実に此の事なり。（「欺かざるの記」明治三十年三月二十一日）

独歩に大きな影響を与えたカアライル（Thomas Carlyle 1795-1881）はヴィクトリア朝のイギリスに最も勢力のあつた思想的文学者であるが、彼の著サルトル・レザルタス（Sartor Resartus）は「衣裳哲学」として早くからわが国でも訳されていた。自然は神の衣であるという汎神論的な世界観と制度・法律・道徳・宗教等は人間社会の衣服であるが、それが今すり切れて着換えを必要としているという社会観・歴史観を基にして当時のあらゆる問題を論じたものである。独歩はこの哲人によって自分が外衣の如きものに被われて存在し眞の姿から遮蔽されているということを教えられたのである。

「牛肉と馬鈴薯」の岡本はそのまま独歩自身であるが、その中で岡本はいう。

Full soon thy soul shall have her earthly freight, And custom lie upon thee with a weight. Heavy as frost, and deep almost as life! この通りです、この通りです！

即ち僕の願は如何にかして此籍を叩き落さんことであります。如何にかして此の古び果てた習慣の圧力から脱れて、驚異の念を以て此の宇宙に俯仰介立したいのです。

また「岡本の手帳」は更にいう。

英語に worldly てふ語あり、訳して世間的とでもいふ可きか、人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人称なる吾、二人称なる爾、三人称なる彼、此三者を以って成立せる場所をいふ。人、生れて此場所に生育し、其感情全く此場所の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に独り吾れてふものの俯仰

して立ちつつあるを感ずる能はざるに至るなり。

幻影よ、幻影よ、

人は悉く最大なる事實を見る能はずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。

吾等は最早太陽を見ざるなり、ただ太陽の幻を見るのみ。月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ。吾等は最早天地を見ることなし、眼底の印象物を見るのみなり……

世界内存在として置かれたわれわれの状況は人それぞれによって千差万別である。われわれはあらゆる状況の中のただ一つだけを生きているのであって、その一つの状況もその選択はわれわれに許されてはいない。それは所謂運命である。しかしまた、それら総ての状況を通じていい得ることは、人間がこの世の中に存在し、他人の間に生き、そこでいろいろの行為をなし、やがて死んで行くという動かすことの出来ない事実である。われわれ一人一人をその始めと終りにおいて限界づけ、更にまた常にわれわれの傍につきまといつてわれわれの可能性を限界づけているもの、これがア・プリアリな人間の条件である。われわれは誰一人としてこの条件から逃れることが出来ないように運命づけられているのである。

今日の実存主義系譜の作家達は、人間をこのぎりぎりの限界状況に立たせ、人間の置かれた状況からわれわれの眼を蔽っている、社会が生み出した既成の態度、既成の価値、それを後生大事に守っている偽善的態度を拒否するのであるが、独歩の人間の眞の姿に驚き

国木田独歩考（第一部）

たいという願ひも、眼を蔽っているそうした既成觀念の幕を払い除けて、ぎりぎりの絶対的状況に置かれていた人間存在の姿に戦慄したいという願ひに外ならなかったと思うのである。

キリスト教によれば、人間に課せられた状況は人間の原罪によるのである。そして神がその救済としています。罪人たる人間は神に救われてはじめて永生を得るのである。しかし今日の実存主義者達には神はない。例えばカミュは原罪のかわりに人間に課せられた不条理を見出す。キリスト教の原罪が、神が存在しないことによつて不条理と入れ換つたのである。カミュの人間は、死に至る病から医されることを希わず、死を背負つたまま生きようとする。死を背負つたまま生きるとは、不条理を不条理として明澄な意識によつてそれを常に眼前に持ち続けて生きて行くことである。カミュはこれを形而上学的反抗という。しかし独歩はカミュのように人間存在の不条理を見、これに対して形而上学的反抗を続けたのではない。彼はクリストへの信仰があつたからである。

一昨夜弟の下宿せる宿屋に一泊せしがその夜半、突然めざめし時、此の生命と存在と此の天地とを驚異するの恐ろしき力もて心を衝きたり。ああ願ふ、常にかく驚異せんことを。

世の中を夢と見る見るはかなくも。

なほ驚かぬわがころかな

ああわが願は驚異せんこと也。

ああわが心のなやみはわが心の眠り、居ることを自覚せる事なり。吾が心の誇は此の自覚なり。されどわが心の悲はこの自覚なり。此の自覚なくして驚異の念の少しだに起る理なし。驚異の念少し

もなくして宗教的信仰ある道理なく詩的熱情ある道理なし。

ああ夢裡の人々よ、夢裡にありて敢て宗教を語る人々よ、詩を語る人々よ、哀れむべきは此の種の人々にぞある。

げに人生は不思議なるかな。ああわが心よ高くさめよ。深く感ぜよ。(下略)

これは「欺かざるの記」の終りに近い明治三十年一月十三日の記である。独歩の願いは、宇宙・人生の姿を直視して人間存在の真実の姿に触れたい、それが絶望的なものであれ狂喜すべきものであれそれは問うところではない。この第一義諦に立たない限り、信仰も芸術も虚仮であり、その生は醉生夢死であると考える。それが、この夜半眼底の曇りを拭って忽然として彼に來たのである。神を信じ、自然を愛し、人を愛し、詩人として生きる。彼の方向は既に決定しているのである。ただその確証として人間存在の真実の姿を掴みたい、これが若き日の独歩の切なる願いであつたのである。

幼少時代「がり亀」とあだ名されて友達に怖れられ、死んで徳富蘇峰をして「故人は我儘だつたが、えらい処があつた」と歎せしめた独歩は自我の強いアクテブな性格であつた。そうした性格は外部の拘束を人一倍強く感じるはずである。「欺かざるの記」は彼の魂の苦闘史であつた。藤村や花袋も同じように彼等が置かれたそれぞの環境において、外部の拘束に抵抗しながら自我を生かすための苦闘を続けた。そしてその自我の苦しい呻きを小説化することによつて救われようとしたのである。彼等が私小説を書いた一因がそこにある。私小説はいわば自我の悩みの捨て場であり、一種の抒情詩でもあつた。しかし独歩の場合は違つていた。彼は所謂私小説はほ

とんど書いていない。「欺かざるの記」が彼の唯一の私小説であつたともいしよう。彼の小説は「欺かざるの記」において赤裸々な自我を吐瀉し尽くしたところから、彼のいう「自我の角がばきりと折れた」ところからはじまつたのである。(未完)